

いた。

——父さんだろうか。

すっと息を吸い込んだ瞬間、胸にドキドキが始まった。しゃがんで受話器を掴んだ。一瞬ためらった。父さんでなかったら、がっかりする。もうがっかりするのに疲れてしまった。——父さんだと期待しないこと。

自分に言い聞かせて、ゆっくり受話器を耳に当てた。

「はい、佐川ですけど」

やっぱり父さんの声を期待していた。

「おれだ、敦也か、団長いるか」

松原さんだった。松原さんは父さんの高校時代の応援団仲間だ。ちょっとだけほっとしたら、泣きそうになった。

「いないんです」

「なんだ、残業か」

もうすぐ七時半になる。

「いえ……」

ゆうべ帰って来なかったとはいいづらい。

「おい、何だ、団長、またお泊りしてるんじゃないぞだろな」

松原さんは、母さんとの離婚の原因にもなった何回もの警察沙汰を知っている。父さんは何日も、何度も、留置場に泊められたことがあるが敦也と二人で住むようになってからは初めてだ。

「わかんないけど、そうかも……」

「しょうがねえなあ、団長も。もう大人なんだからさ、へそ曲げないで適当に頭下げちゃえばいいのに。そうすりゃすぐ帰してもらえのにな、なあ、敦也」

父さんは頑固でへそ曲がりだ。理由も無くいばられると、どんな相手でも話すのを止めて帰ってきてしまう。一度学校で先生と面談があったとき、先生が何か余計なことをいったらしい。さっさと帰ってきてしまった。あとで、先生が謝りに来た。

「敦也、会社には連絡したんか」

「はい。社長さんもうがねえなああっていった」

連絡は昔母さんがやっていたから知っているし、電話機に番号が貼ってある。学校に行く前に電話した。父さんが勤めている大木電設の三村社長は、高校の先輩だ。

でも今朝、隣のふとんが空なのを見て、息が止まるほどぞっとした。付き合いを大事にする父さんは飲んで遅く帰ってくるのが多かったから、気楽に寝てしまったのだ。

いないと思ったとたん、あせって、トイレやお風呂を覗いて、声をかけて回った。流し台の上のコップがなかった帰ってくると父さんは、必ず水を飲んで、コップを置きっぱなしにする。帰ってこなかったんだと思った。

——昼間のうちに帰ってくるかな。

学校でも一日中、父さんのことが頭から離れなかった。怖いことばかり想像して、ときどきブルブルと震えた。だけ